

進化論をベースにした哲学

—— 戸田山和久『哲学入門』への註釈 ——

植 村 恒 一 郎

A Philosophy based on the Evolutionism

—— Some Comments on K.Todayama's "Introduction to Philosophy" ——

Tsuneichiro UEMURA

2014年3月に刊行された戸田山和久『哲学入門』（ちくま新書）は、新書とはいえ約450頁の大著であり、内容も「入門」とは言えない本格的な書物である。それは、ビッグバンから21世紀の今日までの人間=ヒトの進化を一枚の絵に描き出す「自然史」の試みである。哲学においては、カント以来、発生的・歴史的説明ではなく、概念の規範的分析あるいは超越論的分析が主流であったが、本書はそれとは大きく異なる。人間=ヒトはいったいどこからやって来たのかという発生的説明が、人間=ヒトの本性を明らかにするうえで欠かせないと考える哲学、つまり、進化論をベースにした哲学なのである。これまでも生物学や進化論を重視した哲学は、たとえばアメリカのデネット、ミリカン、ドレツキなどに見られ、日本でもこれらは翻訳、紹介されて、個別の論点については専門的な研究論文も書かれている。植村もミリカンについて論文を書き、学会でも発表した（2007年、ハイデガー・フォーラム⁽¹⁾）。しかし、こうした各論の研究ではなく、人間=ヒトの自然史を真正面から構想した日本人の哲学書は、本書が初めてであると思われる。本書は刊行後、東京新聞が「文化」欄一頁を使って紹介した（4月6日⁽²⁾）ほか、日本経済新聞（4月20日⁽³⁾）、読売新聞（5月5日⁽⁴⁾）、朝日新聞（5月11日⁽⁵⁾）が書評に取り上げた。学会誌の書評もこれから続くと思われる。また、科学哲学者で京都大学准教授の伊勢田哲治氏は、ブログで本書の詳細な検討を公開した（4月26日）。本書は、その大胆な構想とともに、詳細で丁寧な論述を特徴としており、今後の日本の哲学研究に一定のインパクトを与えるであろう。

本書の全体構成は、第1章：意味、第2章：機能、第3章：情報、第4章：表象、第5章：目的、第6章：自由、第7章：道徳、というものである。第3章はシャノンの情報理論を、解読者がいない無生物の自然的世界においても「情報」が存在することを示す理論として再提示する興味深いものである。著者の構想は、シャノンの情報理論から、ドレツキの表象理論へと進み、それを発展させたミリカンの表象理論によって進化論的枠組みに組み込んでゆく。そのようにしてヒトの成立を描き出した場合、すべては自然的因果性あるいは自然必然性の内にあるように思われるので、人間の「自由」をどのように理解すべきかを論じたのが第6章である。その議論はほぼデネットを踏襲しているが、著者はデネットの不十分な点も指摘している。第7章は体系的なものではないが、意表を突く論点が提出されている。それはアメリカの哲学者ペレブームの議論を受けたもので、我々の常識とは逆に、道徳にとって自由意志の存在は不要ではないかという主張である。本書はこのような興味深い論点を数多く提起しているが、全体でもっとも重要なのは、第4章の表象論である。小論では、「表象」の問題を中心に、幾つかの論点を検討してみたい。

I 表象に「間違い」が存在することをどのように説明するか

「表象」とは、自分以外の何かあるものを指示する／意味するもので、黒雲が降雨を予知する、キツネの足跡が、そこをキツネが通ったことを知らせる等々は、すべて表象である。もちろん、写真や絵、人間の言語も表象である。著者の構想は、そもそも無生物の段階においても、煙は火を、黒雲は降雨を指示するという指示関係が存在しており、このような表象関係が、原始的生物の生命活動の中に取り込まれ、それが生命の存続と進化に寄与することを示すことである。表象においてもっとも重要なことは、表象が自己以外の何かあるものを指示する／意味するとき、その指示に失敗し、別のものを指示してしまうこと、つまり表象は誤ることがありえることである。だが、無生物のような自然的過程から連続して考えようとする、「表象の誤り」をどのように説明するかは意外に難問なのである。というのも、表象の間違いが起こるとき、表象を支えている物質的メカニズム（脳神経系の物理・化学的活動）そのものは因果性が貫徹しており、そこに「間違い」はなきように思われるからである。これはたとえば、工学的なエンジンとその運動を支えている物理法則との関係を考えてみれば分かる。エンジンは「故障」するが、その場合も物理法則は貫徹しており、物理法則は「失敗したり」「誤ったり」することがない。ニュートン物理学には「故障」というタームはないのである。

すると、間違いの存在する表象と、間違わない因果メカニズムとの関係は、エンジンとそれを支えている物質の物理学的法則との関係に類比して理解できるのだろうか。表象が何かを指示する／意味するという関係は、哲学的には「志向性」と呼ばれるので、小論も以下では「志向性」に用語を統一する。著者の議論の主旨は、表象を間違いうる志向性（上部構造）を、間違いの存在しない因果性（下部構造）に還元するのではなく、間違いが存在しない因果性に支えられて、間違いの存在する表象的世界がありうることを言おうとしているであろう。しかしこれを説明する手続きは複雑で分かりにくい。課題は、「〈意味する〉をフツの因果関係によって説明する（つまり、自然化する）」(p.80) ことである。これをミリカンの「目的論的意味論」は、三段階に分けて行っている。すなわち、(1)「本来の機能」という概念に注目し表象間違いを分析する (p.80)、(2)「本来の機能」を因果関係に還元（自然化）する (p.83)、(3) 本来の機能の自然化を意味の自然化に当てはめる (p.88)、の三段階である。

- (1)「ネズミ表象」とは、「ネズミを意味することが本来の機能であるような表象」と定義される。すると、眼前にモグラがいるのにネズミの表象が引き起こされるのが表象間違い p.82。
- (2) 血液の循環が私の心臓の「本来の機能」であるのは、進化論的に定義され、先祖の心臓が血液を循環させた→先祖が生存上の有利さを得た→私に心臓がある、となる。ここで進化論的定義は、「→」という因果性だけで成り立っている (p.86)。
- (3) 表象の「使い道」という新しい観点を導入して、「表象の本来の機能」が定義される。猫は、お腹がすいたときにネズミを捕えて食べる行動を起こすものが、進化的に生き残ってきたから、猫のトムも当然、ネズミを捕えて食べる行動を起こす。すると、「猫にネズミの捕食行動を引き起こすこと」が「ネズミ表象の本来の機能」とであると定義できる (p.88)。

以上の説明では、「故障」がありうるエンジンのような工学的設計物の「本来の機能」と類比的に、心臓のような生物器官の「本来の機能」がまず進化論的に説明され、次に、生物器官ではなく生物のもつ表象の「本来の機能」が説明される。しかし、生物「器官の本来の機能」と生物がもつ「表象の本来の機能」との間にはギャップがあるように感じられる。そのギャップを埋めるために、「表象の使い道」という新しい視点が導入され、ネズミ表象を生み出す器官と、それを受けて、ネズミ

の捕食行動を起こす器官 (= 表象の「使い道」) という二つの器官が分離されたのだろう。そして、この二つの器官の間のやりとりこそ因果関係ではなく表象を介した志向的關係であるというのが、ミリカン説のポイントであろう。

しかし、二つの器官のあいだの遣り取りが因果関係であってはいけないのか？ また、猫の持つネズミ表象と猫のネズミ捕食行動とが因果性で結ばれていないことがなぜ言えるのか？ 換言すれば、猫が「間違ったネズミ表象」を持ちうると、なぜ言えるのか？ 眼前にいるのがモグラなのに、猫のトムがモグラに飛びかかっていった場合、あるいは、ネズミがいるのに空腹のトムが飛びかかっていかなかった場合、それは「間違ったネズミ表象」を持ったからなのか？ 表象という概念を使わない説明もありうるのでは。つまり以上の説明では、心臓の「本来の機能」のように、「ネズミ表象の本来の機能」がうまく説明されたようには感じられない。

II 北極圏バクテリアの酸素を嫌う行動に「記号」「表象」は関与しているのか

> [北極圏のある種の] バクテリアは酸素を嫌い、酸素の少ない深い海に移動することができる。彼らは単純な感覚器官として小さな磁性体をもっており、それが北を示す方向が深い海の方向になっている。そこは酸素が少ないので生存に好都合だ。しかし、磁石の北の方向とより酸素の少ない方向とは何の因果関係もない。[たまたま北極圏だから]磁性体の北が地磁気の北と一致すること、地磁気の北の方向が海の底に向かう方向であること、そして海の底が酸素の少ないところである、という関係がたまたまずっと保たれているからだ (p.209-210)⁽⁶⁾。

これはミリカンによって提出された、非常に興味深い実例である。ここで、磁石の北の方向と酸素の少ない方向との間に因果関係がないこと (= 局地的関係、つまり繰り返し成り立つ自然的関係であること) は言われている。しかし、バクテリアが磁石の北を感じ、そして、海の底に移動するとしても、それは、磁石が北を感じることが表象の生産であり、その表象を受けて、バクテリアの尻尾が運動して泳ぎだすのが表象の消費であるという関係ではないであろう。とすれば、このバクテリアの能力は、進化の選択の結果であるとなぜ言えるのだろうか。というのは、進化の過程で選択されるには、たんに自然的記号ではダメで、志向的記号にならなければならないというのがミリカンの考えであるならば(下記)、バクテリアの内部に、記号の生産者と消費者という二項が立てられて志向的記号が登場しなければ、進化の過程で選択されないのではないか？

> 記号生産者の本来の機能は消費者がうまく利用できるような真なる表象を生み出すことであって、自然的記号を生み出すのはその副産物にすぎない。……自然界のどんな出来事も何かの自然的記号なのだ。たんに自然的記号を生み出すシステムはありふれたものすぎて、そのことのゆえにえこひいきし選択されることができない。……消費者にとって使い道のある真なる記号をたいていの場合に生み出すからこそ、特定の記号生産システムが選択され、特定の自然的記号が志向的表象になるのである (p.230)。

バクテリアの例は、北極海付近の局地的情報をうまく利用するという段階の例であって、記号や表象はまだ必要ないのか。自然的記号はありふれすぎているから、それだけでは進化の選択の対象にならないとすれば、バクテリアにおいて表象の生産と消費という二項はなくてもよいのだろうか？ 黒雲が降雨を「告げる」自然的記号であることと、「真なるネズミ表象」が猫の捕食行動を引き起こす志向的記号であることとの、ちょうど中間段階として、バクテリアの例があると考えるとよ

いのか？ 自然的記号には「間違い」がないが、志向的表象には「間違い」がありうる。とすれば、「間違いがありうる」という前提の中で、「間違っていない＝真なる」表象をより頻繁に産出・消費するものが生き残るという選択が行われる。とすれば、志向的表象がすでに存在しているところでなければ自然選択は起きないというパラドックスにならないのか？ シャノンの情報や自然的記号から志向的表象が「湧き出す」といっても、両者の間にはまだ「大きな飛躍」があるようにも感じられる。

III 表象の「生産者」と表象の「消費者」という二つの器官の関係

p.224の図19はきわめて興味深い。自然的記号を受け取る感覚器官である眼が表象の生産者、エサに喰い付く足の筋肉を動かす部分が、表象の消費者として、二項が立てられている。物質的な因果関係としては、二つの感覚器官が脳を介して神経で結ばれ、電気信号が伝えられるから、そこには因果関係以外のものは存在しない。しかし、この図19はまったく違う。眼は「ホラよ」と言いながら、志向的表象を手渡し、足は「何でもいいから真なるやつをたのむよ」といいながら、その志向的表象を手で受け取っている。そして、手渡される「△」は、二つの手の間で宙に浮いているときは「志向的表象／記号」とされているが、しかし、「これが正常に働くと、△は自然的記号でもある」とも言われている。

△が「真なる表象」であることが頻繁に生じれば、それは自然的記号でもあるというが、しかし、「間違いがありうる」という前提において「間違っていない＝真なる」表象（＝志向的表象）と、はじめから間違える可能性そのものがない自然的記号とはやはり違うのではないか？ 「真なる表象」である頻度が高ければそれは自然的記号でもあるという意味がよくわからない。

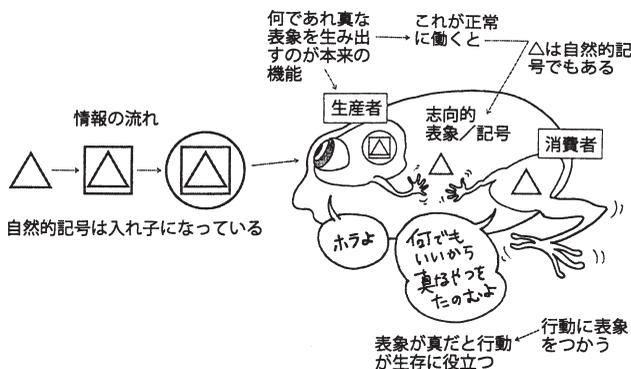


図19 志向的記号と自然的記号の入り組んだ関係

また、図19が生産者と消費者という二項を立てた理由は、両者の間が△という志向的表象で結ばれるという点がポイントで、因果関係ではない関係で両者が関係するというのが重要なはず。生産者と消費者は、一匹のウサギの目と足であってもよいし、親のメンドリとヒヨコであってもよい(p.220)。つまり、偽でもありうる志向的表象の真である頻度が高ければ、それは生存に有利だから自然選択された。この説明は、「本来の機能」を言うためには、進化による選択に訴えねばならず、進化による選択は、偽でもありうるものの中から真である表象をより高い頻度で活用できるものが生き残るという基準に訴えねばならず、そのためには、生産者と消費者という項を分離して、両者を外的に対立させる必要があるというロジックではないのだろうか？ これがいけないということは、科学的事実というよりは一種の要請であり、形而上学的な思考実験ではないのだろうか？

IV 「オシツオサレツ表象」は表象の生産者／消費者の分離とどう関係するのか

p.240の図21、「オシツオサレツ表象」も興味深い哲学的思考実験である。「オシツオサレツ」というのは、ロフティングの『ドリトル先生』に出てくる動物で、頭が二つある動物である。そのような訳語を案出したのは訳者の井伏鱒二である。オシツオサレツ表象は「真なる表象」のようなものではなく、記述面と指令面が一体化している表象のことであり、蜜蜂のダンスやアフォダンスのようなものだけでなく、「ハンバークは手で食べるものじゃないのよ」という人間の発言、そして、体内のいたるところで用いられている神経伝達物質や化学的メッセンジャーもそうである。それらを分泌する細胞・組織・機関の状態を告げると同時にそれを受け取った側がどう反応すべきかを指令しているからだ (p.240)。

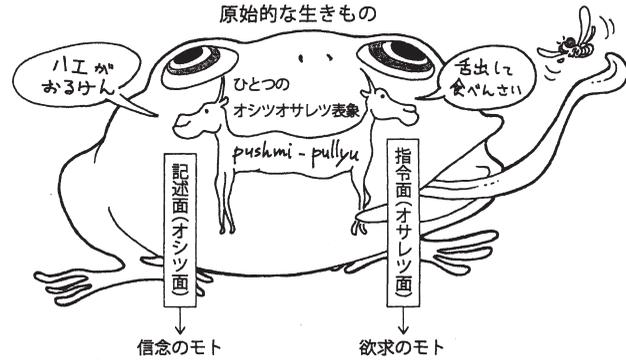


図21 オシツオサレツ表象

だが、図19における表象の生産者と消費者の分離も、状態を告げる前者と、それを受け取って行動する消費者という関係にあった。つまり、表象の生産者＝記述面、表象の消費者＝指令面という対比が成り立つ。ところが、オシツオサレツ表象は、記述面と指令面が統一されているところに意味があるという。そして、進化の過程で克服されたのではなく、たとえば自宅内での日常的な行動などはアフォダンス知覚であるし、「ハンバークは手で食べるものじゃないのよ」のような記述的言明もそうであり、進化した人間においてもオシツオサレツ表象は消え去らずに生きている。しかし他方では、オシツオサレツ表象を想定する意義は、今は記述面と指令面が一体だが、進化のずっと先においては、記述面が独立したものが「信念」、指令面が独立したものが「欲求」になるとされる。つまり、オシツオサレツ表象は、信念と欲求がそこから分岐してくる源表象のようなものと考えられている。

「ハンバークは手で食べるものじゃないのよ」は明らかに真偽をもつ言明だから志向的表象であるが、神経伝達物質や免疫系の化学メッセンジャーには真偽がないから自然的記号ではあっても志向的表象ではない。表象の生産者と消費者の分離というモデルは、間違いのありうる志向的表象の発生を説明するという意義をもっていた。しかしオシツオサレツ表象は、神経伝達物質も「ハンバークは手で食べるものじゃないのよ」を共に含むから、志向的表象の発生を説明するためのものではない。ではいったい、オシツオサレツ表象はどのような事柄を説明するためのものなのか。進化における自然選択は、志向的表象における「真なる表象」を生産／消費する頻度という基準によって行われたとすると、志向的表象ではない神経伝達物質のようなオシツオサレツ表象は、自然選択される基準が違うはずだ。人間が進化の結果獲得した、「主語と述語に分節化され、否定形をつくることのできるような表象」(p.268)、「内容に拘束されない自由な推論が可能な表象関係」(p.266)というのはよく分かるが⁽⁷⁾、オシツオサレツ表象とは非常なギャップがあるように感じられる。原始的なオシツオサレツ表象から人間の言語のような高度な表象への進化を説明するのは難しい課題だと思われるが、表象の生産者／消費者という区別を立てたのとは独立にオシツオサレツ表象を考えるこ

との利点はどこにあるのだろうか？

>人間はオシツオサレツ動物とは質の異なったまったく別次元の存在なのではない。目的手段推論というちょっとした拡張機能つきのオシツオサレツ動物なのである (p.287)。

我々の日常生活のうち、たとえば自分の部屋や家の中での移動、あるいは通勤などはアフォーダンス的行動であるから、オシツオサレツ動物の側面があることは理解できる。しかし、現在の状況を把握し、未来の状態を予想し、そのうえで合目的な選択をする目的手段推論は、人間の言語のような高度な言語を必要とする。志向的表象やオシツオサレツ表象から人間の言語までのギャップは途方もなく大きい。このギャップを埋める進化論的説明はまだ誰によっても与えられていないだろう。とすれば、著者がここ言っている「ちょっとした拡張機能つきの」という表現は楽観的すぎるのではなかろうか。

V 心を認知計算メカニズムとみなす決定論では志向的表象はどうなるのか

第6章で著者は自由の問題について論じる。何をもちいて自由とみなすかについては、さまざまな哲学上の立場があるが、著者は自由の一番基礎にあるものとして、動物とも連続する「自己コントロール」を挙げる。しかしながら人間は、「自己コントロール」を基礎としながら、合目的で合理的な選択をすることができる。この選択を「自由意志」による特権的なものであると考えるのが、いわゆるリバタリアンであるが、著者は、合目的な選択も他者を含めた環境への適応行動の延長として捉えようとする。しかし、そのように考えたとしても、環境の現状を把握しそれに対する行動を選択することは、我々の心において行われている。すると、心における判断や決断とは何かという問題になる。著者は、心を一種の認知計算メカニズムとみなす。しかし、そのことと、自由とはうまく整合するのだろうか。

志向的表象を認めるとしても、因果の世界とは別の独立した志向性の世界があるわけではない。志向的表象もまた進化を通じて、因果性の働く世界の中から「湧き出して」くる。そのような前提で考えた場合、環境入力と内部メカニズムからなる「認知計算メカニズム」を心であるとする、認知計算メカニズムの内部には志向的表象は存在するのだろうか。図19の表象の生産者と消費者という二項の分離は、認知計算メカニズムというモデルの中でも成り立つのか。合目的な合理的な選択行動として自己コントロールできることに自由を見出すとすれば、それは工学的な設計に類似した話であり、エンジンの「本来の機能」という目的のために「物理学の因果的必然性をうまく組み合わせる」「必然性を自由に使いこなす」と似ていないか。認知計算メカニズムという発想に、物理学レベルと区別される、より高次の工学レベルに相当するものを考える余地はあるのだろうか。認知計算メカニズムモデルでは、因果性の世界の外部に立って、設計したり目的を立てたりする視点が取れるのだろうか？

VI 科学の一部としての哲学は可能か

著者はデネットを援用し「回避」について次のような興味深い議論をしている (p.333)。巨大隕石が地球に衝突しようとしていることが分かり、大騒ぎになったが、衝突の少し前に、別の小惑星が接近することも分かり、隕石と小惑星との相互の引力作用により、隕石の地球への衝突は間一髪で免れた。この場合、我々は「避けられた大参事」という言い方をして、胸をなでおろすであろう。

だが、「避けられた大参事」とは何か？ そのようなものがあるのだろうか。自然の因果性のレベルで検討すれば、隕石の運動も小惑星の運動ももともと決まっていたものだから、地球との衝突などはもともと起こりなかった。つまり、「大参事」はもともと存在しえないのだから、それを「避ける」ということも起こりえない。そもそも、隕石と地球の衝突という「大参事」を想定するのは、物理法則ではなく、別のレベルで物事を考える人間の想像力である。つまり、「大参事」や「回避＝避ける」というのは、人間学的な概念なのである。「避ける」「違いをもたらす」「退ける」等々は人間学的概念であり、「うまくいく」「故障する」等の工学的概念と似ているところがある。エンジンの「故障」と、故障の存在しない物理法則とが両立したように、ここでは、「避けられた大参事」という人間学的概念と、衝突などは起こらないという天文学的法則とは両立する。そしてこの両立は、志向性と因果性の階層構造の違いによる両立と類比的であると考えられる。このように考えれば、人間学的概念としての「自由」と物理的因果的必然性は両立しうのではないか。

大筋においてこのように考えることができるが、しかし「避けられた大参事」のような人間学的概念と物理学的因果的必然性の区別は、科学の内部で与えられるものではないだろう。哲学的な大きな構図の中で初めて、この区別そのものがうまく語れるのではないか。著者は一方で「科学の一部としての哲学」という言い方をするが、実際に行っていることは概念分析であり、それは科学の外部にある哲学の仕事であると思われる。

著者は、我々が熟慮や検討を行ったのちに選択し、その結果としてある出来事が生じることと、地震や台風のように熟慮や検討とは無関係に生じる出来事とを区別する。前者においては、さまざまな程度において実現するエンジンの「本来の機能」においても、それぞれに対応する必然的物理法則が存在してかまわないのと同様に、人間の行為においても因果的決定性は存在しているのみならず不可欠のものでもある(手で押せばスイッチが入る等々)。自由な行為はこのような因果的決定性とは両立するのであり、両立しないのは、我々の検討や熟慮とは無関係に生じる出来事であり、これを著者は宿命論と呼ぶ(p.329)。この決定論と宿命論の区別は重要である。「私の検討の結果生じる出来事」というのは(たとえば、パリに観光に行くのをやめてロンドンに観光に行く等々)、人間学的な概念であり、たとえそれが決定されているとしても、それはさまざまな因果性を自由に組み合わせる我々が操作的に活用する因果的決定性である。ジェット機の飛行に関する因果的決定性がなければ、我々はそれに乗ってロンドンに行くことができない。

著者は「科学の一部としての哲学」と言っているが、実際に本書で行っていることは、科学外
の概念分析を含めた哲学である。とすれば、全体的な構図を描く基礎概念として、アリストテレスのように、可能態／現実態という様相概念を使うことが有効なのではないだろうか？ アリストテレスは、運動(変化)を定義するのに、時間や場所という概念を前提しない。「可能的なものとしての限りにおける可能的なものの完全現実態が、運動である」のように、可能的／現実的という様相概念のみを使って運動(変化)を定義している。つまり運動(変化)の内容に関わるタームを使わずに運動(変化)を定義している。このことは、進化のプロセスを記述するとき不可避免的に生じるある種の循環を考慮するならば、示唆されるところが大きいように思われる。というのも、進化論をベースにするということは、現在の意識と高度な言語を持つ我々の視点から、それらを持たない、より動物的な段階だったヒトの祖先の過去の状態を描くことが必要になるが、その描写には我々の高度な言語を用いざるをえないという循環があるからである。本書のような、進化論を含む大構想を語ろうとすれば、どうしても哲学的に強力な概念、特に様相概念を最初に置かなければ、進化のような根本概念や「本書を貫く発生的視点」(p.286)のような重要概念を定義できないのではないか？ 進化の結果から進化を説明しようとする循環論法的なパラドックスに本書が各所で直面して

いるように思えるのも、まだ十分ではない進化についての科学的事実・経験的事実をうまく組み合わせるための哲学的概念装置の活用が不足しているからのように思われる。「我々にとって先なるもの」「事柄において先なるもの」の区別、そしてさまざまなタイプの両者の循環が避けがたいこと。進化論を「使う」為にはこうした概念的準備の複雑な枠組みが必要だろう。形而上学には本書に役立つ概念がたくさんあり、使わないのはもったいないのではないか。

著者は、「ビッグバンから現代社会までを同じ唯物論的視点で描ききる」(p.140)ことが本書の目標だと述べている。この場合、唯物論的視点というのは科学的視点ということと同じであるが、ここにも問題がないわけではない。それは、諸科学の共約不可能性という問題である。すなわち、科学一般というものはなく、諸科学があるだけで、それぞれの科学はそれぞれ異なった自分の理論空間を設定するからこそ、その理論空間によって開示される実在を捉えることができる。しかし、ある科学の理論空間とそれに内在する諸実在が開示されているその限りにおいて、その理論空間は他の科学の理論空間と共通性をもたない。だから、複数の科学の理論空間は相互に共約不可能なところがあり、一つの大きな理論空間の中に複数の理論空間を並べることはできない。つまり、著者の考えるような「自然史」を「一枚の絵に描き出す」ことができるかどうかは判明ではないのである。こうした共約不可能性の問題を捌くためにも、様相などの哲学的概念が必要になると思われる。

Ⅶ 「行為者因果」についての著者の反感は、まだ考察が不足しているのではないか

著者は第6章で、チザムの「不動の動者」の議論を引用して厳しく批判しているが(p.304～)、自由な行為は自由意志ではなく身体運動による因果性の開始であることを見落としているのではないだろうか。これまで自由について一番肝心の事を述べた哲学者たちは、身体運動の例で説明している。アリストテレスの「嵐の舟から荷を捨てる」、カントの「椅子から立ち上がる」、またホップズは「鍵のかかったテニスコートは身体運動に対する障壁であるがゆえに、テニスをする自由への外的障壁」という主旨で、プラムホルの自由意志論を批判した。つまり、自由というものは「自由意志」にあるのではなく、行為にある。チザムも「われわれはそれぞれ、行為するときには、不動の第一動者である」(p.304)と言っており、自由意志とは言っていない。言葉を語ることも、口を動かす身体行為である。ルターも「私はそれ以外のことはできません」と行為について語っている。

因果の開始というのは、ラプラス的に考えればありえないように思われるかもしれないが、行為の主体は「身体をもった人間」であり原子の集合体ではない。自由があるかないかは行為についてのみ言える。人間を原子の集合体のレベルで捉えることももちろんできるが、それは行為の主体として人間を捉えたことにならないから、自由を否定することにはならない。カテゴリーミステイクがあると言うべき。そして、人間の行為というのは、自分の身体の外部世界に何かを新しく引き起こすことであるから（自分の発言によって相手を怒らせる、コップの水を捨てる、プロポーズに対して頷く、核ミサイル発射のボタンを押す等々）、その限りにおいて「因果の開始」を言うのはおかしいことではない。行為者因果を「トンデモナイしろもの」(p.305)などと茶化するのは誤りではないだろうか。

Ⅷ 概念工学としての哲学は概念の改訂を行う

著者は、「科学の一部として哲学をやろうぜという立場を自然主義と言う」(p.34)と述べている。

しかし、本稿が論じたように、科学の概念だけを使ったのでは著者が語ろうとしたことを語れないのではなかろうか。著者は哲学の仕事を「概念の改訂」だとして、次のように述べている。

>哲学のメインの仕事は、われわれの実践に有用な概念をつくること、あるいは概念をより有用なものに改訂することだ。そういう意味で哲学は実に工学に似ている。哲学は概念工学と言ってよいかも。概念だって人々に幸せをもたらさうする人工物だもんね (p.146)。

著者のこの見解にはほぼ賛成したい。だが、自由、幸福、善、美、真・偽、因果性、志向性、可能性、必然性、時間、空間のような重要概念は、科学の内部だけからはその「良い」規定を与えることはできないだろう。科学の理論的定義をより優れたものにすることは、概念を人間に幸せをもたらすためにより良い概念に改訂することと同じではない。哲学は後者であり、そのためには日常生活・生活世界の中に、こうした哲学的な重要概念が根を持っていることを見落としてはいけない。もちろん、これらの概念は科学にも根をもっており、科学の理論的定義は哲学の概念改訂作業の中にうまく取り入れなければならないだろう（アリストテレスもデカルトもカントもそれがメインの仕事だった）。だから、哲学は科学の一部にはならないと思われる。

註

本論考は、2014年9月21日に東京・学士会館で行われた戸田山和久『哲学入門』の合評会（植村が主宰）を踏まえて書かれた。出席された戸田山和久氏、および活発な議論に参加された方々にあらためてお礼申し上げたい。本論考はその時の議論を参考としている。

* 戸田山和久『哲学入門』（ちくま新書1060、2014年3月11日刊）

本文中で説明抜きに書かれている数字は、本書のページ数である。

- (1) 植村恒一郎：時間様相について（『Heidegger-Forum』第2号、2008年4月）
- (2) 東京新聞・文化欄では、著者の唯物論的世界観が強調されている。この宇宙は基本的には「物」だけから構成されているが、どういうわけか人間にとっては「心」が別にあるように感じられる。我々が「心」として理解しているものを、いかにして「物」の世界の中に書き込めるのか。伝統的な「物と心の二元論」に替わる構図を提出しようというのが著者の意図。
- (3) 日本経済新聞・書評（評者は、森岡正博大阪府立大学教授）では、「自由意志」や「道徳」が脳科学の進展によってどのように影響を受けるかという、本書の倫理的な側面に注目している。
- (4) 読売新聞・書評（評者は、須藤靖東大学教授）では、評者が物理学者であるためか、物理学的決定論と「自由意志」との関係に着目している。本書のオヤジギャグ風の軽い語り口にもかかわらず、本格的な哲学書であると評価は高い。
- (5) 朝日新聞・書評（評者は、佐々木敦早稲田大学教授）では、評者が文学やサブカルチャーの専門家であるためか、従来の哲学の多くが文学的あるいは文学寄りであったのに、本書は科学寄りであることにある種の驚きを表明している。
- (6) 北極海のバクテリアについては、ミリカンが下記で論じているが、記述が短い。
 - ・ミリカン：バイオセマンティックス（信原幸弘編『心の哲学 翻訳篇』2004、勁草書房）
- (7) ミリカンは下記で、人間の言語の本性として、否定形や推論について論じている。
 - ・ミリカン：『意味と目的の世界』（信原幸弘訳、2007、勁草書房）p.308-319
 - ・Millikan: *Language, Thought, and Other Biological Categories* (1984, MIT Press)p.221f, p. 297f.